

# 幼児の巧みな動きを育むための運動遊び教材の試作 ～子どもの動作の習得状況に関する実態調査から運動遊び教材を考える～

【代表者】廣兼 志保 島根大学 教育学系 教授

## 【研究の目的と内容】

### 【研究の目的】

本研究の目的は、現代の幼児の身体的な不器用さや運動機能の発育の遅れを背景に、保育者と保護者を対象としたアンケート調査及び子どもの運動遊びの観察から子どもの動作の習得状況を把握し、幼児が楽しく体を動かしているうちに動作を習得できるような運動遊び教材を試作し試行することである。

なかでも、肩から手首にかけての上肢の運動の発達段階についての先行研究が少ないことや、手首の動きは粗大運動にも直接つながる重要な意味を持つことから、本研究では、家庭や保育施設における手首を中心とした上肢の動きに関する幼児の動きや生活動作の習得度及び上肢を使う設備の実態の把握、それらの実態に関連した問題点の考察、問題解決のための運動プログラムの作成に取り組んだ。

### 【研究の内容】

#### 1. アンケート調査について

運動プログラム作成にあたって、対象児の実態を把握するために、アンケート調査を行った。詳細は下記の通り。

調査期間:令和元年 12 月

保護者用アンケート:配布部数 50 部、回収数 41 部、有効回収数 41 部、有効回収率は 82.0%

担任用アンケート:配布部数 4 部、回収数及び有効回収数 4 部、有効回収率は 100%

調査内容:上肢を使う設備の現状、上肢を使った遊びの現状、上肢を使った日常動作の習得度、手首をひねる動作に対する保護者とクラス担任の意識等

#### 2. 運動遊びプログラムの試行について

事前の観察・評価:令和 2 年 2 月 17 日

運動遊びプログラムの実施:令和 2 年 2 月 18 日

事後の観察・評価:令和 2 年 2 月 20 日

対象児の人数: いずれも 24 名(男児 8 名 女児 16 名)

新体操のリボン運動を題材に、螺旋、蛇形、8 の字の動作のアナログを組み込んだリズムダンス、固有感覚に働きかけるタッチ、リボン運動遊び等を展開し、事前・事後の観察・評価からプログラムの有効性を考察した。

## 【研究の成果(本研究によって得られた知見、成果、論文、学会発表、外部資金への応募見込み等)】

### 【研究の成果】

#### 1. アンケート調査について

全身運動を伴った上肢を使う遊びやスナップを必要とする遊びは少なく、日常生活動作は、洗顔、歯磨き、雑巾絞り等ではできる割合が低い傾向にあった。家庭では、上肢特に手首の動作を必要としない設備が大半を占めており、環境・設備が便利になりすぎるとは子どもの発達阻害要因となると危惧されていた。以上のことから、子どもが楽しんで手首を中心とした上肢の動きを習得するための遊びによる工夫が求められていることがわかった。

#### 2. 運動遊びプログラムの試行について

事前のアンケート調査と観察において動作が安定してできる子どもが多かった螺旋と蛇形では、運動遊びプログラム実施後も動作の習得が維持され、事前の観察において動作ができなかった子どもが多かった 8 の字では、運動遊びプログラム実施後に動作が上達したことが明らかになった。したがって、本研究で実施した運動遊びプログラムは、新体操のリボン運動における螺旋、蛇形、8 の字の動作、及びこれらの動作に含まれる外回し・内回しや振動の習得に効果があり、とりわけ、正中線を超えて行われるクロス動作の習得に効果があったと評価できた。

また、運動遊びプログラム実施後の子ども達のふりかえりの言葉を分析した結果、子どもから見たリボン運動遊びの楽しさや面白さは、想像の世界の中で、仲間と触れ合ったり関わり合ったりしながら、思い思いにリボンの動きや形を生み出すことで創造力を発揮できること、であることがわかった。したがって、これらの要素をプログラムに盛り込むことによって、幼児が楽しく体を動かしているうちに動作を習得できるような運動遊び教材を作成できる

ということが示唆された。

**【論文】**

本研究の成果を、以下の論文において発表した。

- 1) 正岡さち・水師美佳・伊藤優・廣兼志保(2020)幼児期の上肢を使う動きに関する実態～運動プログラム作成のための資料として～.教育臨床総合研究.第 19 号.島根大学教育学部附属教育支援センター.
- 2) 廣兼志保・伊藤優・正岡さち(2020) 幼児を対象としたリボン運動遊びプログラムの試作～上肢の動作に着目して～.教育臨床総合研究.第 19 号.島根大学教育学部附属教育支援センター.